

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

(領域ごと)

- ①言葉の特徴や使い方に関する事項 良好な結果であった
- ②情報の扱い方に関する事項 大変良好な結果であった
- ③話すこと・聞くこと 良好な結果であった
- ④書くこと 良好な結果であった
- ⑤読むこと 良好な結果であった

(問題形式)

- ①選択式 良好な結果であった
- ②短答式 大変良好な結果であった
- ③記述式 良好な結果であった

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

最も正答率の高かった問題は、1三(2)イの送り仮名に注意して、漢字を文の中で正しく使うことができるかどうかをみる設問であった。

一方、最も正答率の低かった問題は、1二の図表やグラフなどを用いて、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することができるかどうかをみる設問であった。

また、無解答率の高かった問題は、3二の目的や意図に応じ、話の内容を捉え、話し手の考えと比較しながら、自分の考えをまとめることができるかどうかをみる設問と3三の日常で使われている敬語を理解しているかどうかをみる設問であった。

分析

すべての領域・問題形式で、全国平均を超える正答率であった。特に、全国平均と比べて高かった項目は、領域では、③話すこと・聞くことであり、問題形式では短答式であった。③話すこと・聞くことに関しては、2020年度から「言語活動の質を高め、子どもたちの言語力の向上」を目標に取り組み、中期である昨年度からは「言語活動を通して表現する」ことに重点をおいて授業づくりを行っている。アウトプットに重点を置き、話すための手立てや支援を考えながら授業づくりを行っている成果であると考えられる。

課題は昨年度まで低かった無解答率が、全国平均値に近いことである。コロナ禍の影響もあり普通の授業から課題に対してグループなどで話し合いながら解決していく活動が少なく、困難な課題をやり遂げる経験が以前より少なくなったことも原因だと考えられる。

○●算数●○

(領域ごと)

- | | |
|---------|-------------|
| ①数と計算 | 良好な結果であった |
| ②図形 | 良好な結果であった |
| ③変化と関係 | 概ね良好な結果であった |
| ④データの活用 | 良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|------|-----------|
| ①選択式 | 良好な結果であった |
| ②短答式 | 良好な結果であった |
| ③記述式 | 良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

最も正答率の高かった問題は、1 (1) の伴って変わる二つの数量について、表から変化の特徴を読み取り、表の中の知りたい数を求めることができるかどうかをみる設問であった。

一方、最も正答率の低かった問題は、2 (3) の正三角形の意味や性質について理解しているかどうかをみる設問であった。

また、無解答率の高かった問題は、4 (3) 示された棒グラフと複数の棒グラフを組み合わせたグラフを読み取り、見出した違いを言葉と数を用いて記述できるかどうかをみる設問であった。

分析

すべての領域・問題形式で、全国平均を超える正答率であった。特に、全国平均と比べて高かった項目は、領域では、数と計算、問題形式では、記述式であった。

数と計算に関しては、基礎的な計算力の向上が正答率の高さにつながっていると考えられる。普段の授業から基礎基本の定着を大切に進めたり、困り感を持っている児童に対しても個別指導を行ったりしている成果だといえる。また、昨年度同様記述式の正答率が高かった理由としては、国語と同じく年間を通して、問題の解決過程や結果を図、数、式などを用いて、数学的に表現し合う活動を多く取り入れていることや、「書く」活動を多く取り入れていることで、「書く」ことへの苦手意識が低いことにあると考えられる。

国語同様無解答率が、昨年度より大きくあがったことが課題である。特に無解答率の高かった問題は、Dデータの活用の領域の記述式の設問であった。3つの言葉と数を使って、記述をするなどの、条件付きの記述式の問題に抵抗をもつ児童が多くいると考えられる。また、全体の正答率が全国平均を上回っているものの、百分率で表された割合について理解しているかどうかをみる問題の正答率が低かった。これは昨年度同様の結果である。今後具体物を使用したりしながら、最初の簡単な例を確実に理解できるように取り組みを進めていく必要がある。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

国語に関しては、前年度は平均正答率が、全国平均よりも高い水準であった。本年度は、平均正答率が全国平均よりも少し高い状態となった。算数に関しては、昨年に比べて少し下がっているが、継続して平均正答率が高い水準を維持している。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

学力高位層は、3年前より上昇傾向にあり今年度も増加した。一方、学力低位層は、前年よりも割合が高く増加しており、エンパワー層においても増加している。ただし、経年変化で見えていくと低位層・エンパワー層ともに減少している。このことから、年度によって高低はあるものの、年々学力の底上げを進めることができていると言える。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

楽しく分かる授業づくり ～確かな言語力を育む、言語活動の充実～

<テーマの具体>

○楽しく

「分かることが楽しい。」「できることが楽しい。」につながるような手だてや仕掛けをつくること。
(知識・技能)

「やってみたいな。」「考えてみたい」と思う手だてや仕掛けをつくること。
(興味・関心をもって、学習に取り組めるように。)

<国語に関して>

○言語活動の充実

言葉の力を高めるために、言語活動を充実させる。
言語活動を充実させることで、「楽しい」「分かる」につなげる。

○言葉の力を高めるとは

語彙数を増やす。表現力を高める。言葉で伝え合うことのできる力をつける。

○今後について

2020年度から6か年計画で、言語活動の質を高め、子どもたちの言語力の向上を目指し取り組んでいる。後期になる来年度は、これまでの言語活動の充実を図ってきた成果をもとに、単元のスタンダードを充実させるよう取り組んでいく。

<算数に関して>

○問題解決型の学習形態で、学習を進め、自分で考えたり、グループで考えたり、全体で考えたりと、様々な方法で思考を促していく。また、表現することを大切にし、自分の考えを書いたり、その考えを人に伝えたりする活動を多く取り入れている。

○今後について

これまで同様基礎・基本の定着を目指し、引き続き学力の底上げを目指す。